



# 第四十六回史跡めぐり資料

林泉寺  
勝林寺  
宝正院

越谷市郷土研究会

# 第四六回史跡めぐり案内

## 目次

一日 昭和四十七年三月廿七日

一 集合 午前九時三十分 越谷駅構内

一 場所 越谷市増森 東正寺（宝正院）

同 増林 林泉寺。

同 駒止の榎 市指定文化財

同 勝林寺

同 二十一仏 県指定文化財

考古資料

一 コース 東武バス野田行

○ 新方橋下道 林泉寺へ：駒止の榎

○ 勝林寺へ：二十一仏

○ 増森 東正寺：（宝正院）

一 会場 二〇〇川 弁当各自ご持参下さい。

主催 越谷市郷土研究会

概観（出典のあらまし）……………二頁

新編武蔵風土記稿卷之二百六

埼玉通之八 一七七頁下段より

〃 一七九頁下段まで

### 細説

越ヶ谷市の史跡と伝説より……………五頁

金石文資料集より 十三頁……………一三頁

星野昌治氏の二十一仏船説……………九頁

### 其の他

文化財指定一覽表より

市指定天然記念物

の 県指定文化財

考古資料 二十一仏

※ 志察 山岳信仰と旧荒川旧利根川沿線……………四頁

右 本文記載の原典として掲載し、細報

にわたる御研究の方は参照して下さい

風養ふる方は研究会（市立図書館内）へ

お問い合わせ下さい。

当地区は今圖で二圖目であるが、第一圖目は肥和四五五六月二八日の第三十三圖史跡めぐりであつた。當時は未開発のみまゝのものが、

其の後調査の結果追加する事などもあつたので、今圖それらを併せ研究しようと思ひますので、どうぞ見逃がさないよう願ひます。

### ◎見学予定地の概観

一、武蔵風土記稿卷二百六十一崎玉郡の八(一七七頁) 増森村の項によれば次のように書かれてある。

増森村は江戸への里敷と里、民戸百三十、西は増林村、南は元荒川を隔て、東方村に接し、東北は古利根川を廻らし、川を延えて逆鉈那川下、赤岩二村なり、東西六町、南北十五丁、用水は増林村より引けり、御入圃以来海科所にして、検地は前村と同じく、元禄八年、酒井河内守 札せり。

- 高札場 北の方にあり
- 水名 西川組、新田組
- 古利根川 東北を流る。幅四十間許
- 元荒川 西の方を流る。幅二十五間
- 千間堀 村の中程を流る。岩槻領諸村の雨水落にして、末は古利根川に入る。
- 香取社 東正寺の持

- 水神社 金鏡院持。以上二社村の鎮守なり。
- 并天社 眞正寺持
- 第六天社 清覚院持
- 稻荷社四宇 一は東正寺、一は観音寺、外二社は清覚院の持なり。
- 東正寺 新長真言宗、下総國清水村の念持院の末清池山不勒院と号す。本尊胎藏界大日如来。坐像にて長さ一尺餘。運慶の作と云う。天文二十一年の起立にして附山寶永天正四年八月四日遷化せり
- 鐘 楼 鐘は近江の作なり。
- 不勒堂 天神社 清淨社
- 觀音寺 同宗同末。醍醐山と号す。大永三年尊慶と云う僧の起立本尊阿彌陀を興ず
- 觀音堂
- 金鏡院 東正寺門徒、下二ヶ寺に同じ、元和元年僧侶萬の勢なり、本尊十一面觀音は良承の作と云。立像にして長一尺三寸餘

- 不勒堂 同門迄、慈光山と号す。寛永六年僧尊海の創立、本尊十一面観音を安じり。
- 眞正寺 寛永と耳傳賢明の草創なり。
- 眞光寺 本尊阿彌陀。
- 清覚院 本山派修験、葛飾郡幸手不勒院既下なり、本尊不勒。
- 慈光庵 薬師を安ず、眞正寺持
- 東光庵 ここの薬師を安ず、東正寺持

註 東正寺改め眞正院とする、この場合東正寺持は、眞正院持とみる。

二 増林村

増林村は民戸二百四十、東西二十町、南北十三町許南は山林村、東は増森村、西は葛西用水堀を隔てて大吉村、北は吉判坂川を越えて葛飾郡上下赤岩村なり、用水は松伏溜池井より引汲げり、御打入より今に御料所にして、検地江戸への行程等は前村と同じ。其後後耳雨繁の地は、享保十六年柴村藤右衛門伊藤市兵衛、寛保三年垣谷八木夫、岩松通右衛門、延享三年舟橋安右衛門、宝曆五年川野佐木夫、明和と享遠藤兵右衛門等検地して貢税を定めしと云、

○ 高札場 東の方  
にあり

- 吉判坂川 東の方を流る。これ正當院と葛飾郡と足立郡湖江、谷吉田、及細中、八条、新方、等八ヶ領半組合の溜井あり、水を松伏溜池に云々、当村と大吉村境にて一流を分てり、これ則前の八ヶ領、谷吉田、湖江、西葛西四ヶ領の用水くつて、西葛西用水路と唱ふ。葛飾郡松伏村溜池の用水を見る。元荒川 南を流る、中
- 沢間社 村の鎮守、福 末社 山王
- 香取社二宇 一は宝徳院、一日 村民の稱はり。
- 八幡社 相光院 末社 稻荷
- 天神社 一は大正院の持、 一は村民の持、 明神社 大正院
- 林泉寺 浄土派、江戸芝居上寺末、正徳山と云す、南山東慈文正元年三月に寂す。
- 鐘樓 享保三年築、 観音堂 正徳寺及び子母
- 勝林寺 禅宗曹洞派、下荒井村岡原村の木、法恩山と号せり、南山堂又曰天文に廿四

日敷町。十一番地  
にあり。鐘樓 正徳寺  
鐘なり。

○ 観音堂 ○ 福寿院 新教員吉泉、瓦曾根村、照道院末、鶴井山と号す。

本尊は正観音を安ず。用山長満、寛文三年正月廿九日遷化する。

○ 宝蔵院 同泉、下総国葛飾郡清水村金泉院の本尊不動を安ず。用山長満、延宝四年十一月二日遷する。

○ 法立寺 日蓮宗、下総国平賀村本土寺末妙富山と号す。用山百明正保元年十二月十日

示炊不尊 三十番神堂

○ 清傳寺 林泉寺末なり。真城山と号す。用山証

殊陀を安ず。 ○ 浄泉院 同末、本尊

○ 清了院 勝林寺の末、本尊観音を安ず。 ○ 梅光院 本山派

葛飾郡幸手不動院の配下、香正山と号す。本尊不動

○ 大正院 同配下、増林山と号す。本尊も又、前に同じ

○ 禁師堂

○ 虚空蔵堂 ともに酒肴、呪の和せり。

註 史蹟と文化財とから、越谷発展の経路が浮び上つて

来る。鎌倉以後の政策、古河公方と幸手の努力、下総と北条の接点要所大相模、碓井運と用水の旧荒川旧利根川を背景に展開し文化の交流も陸路は徳川以後なり。

### 越谷市文化財

一 林泉寺の駒止めの模 樹種らんまき

市指定天然記念物 (まき科に属す)

ト 所在地 越谷市大字増林三八一三番地

2. 名 林泉寺の駒止めの模

3. 指定年月日 昭和四二年一月十一日

### 解説

昔 東照公(家康)が、この地方で野遊びの折、当寺に立寄り、衆馬をなぎ、小便されたといえられる。尚口をすすぎ、手を洗われたと伝えられる「権現井戸」も境内にある。

註

① らかんまきは、中国原産の常緑針葉樹で、雌雄異株であるが、駒止めのまきは雄株である。

② 杜梨樹令 四〇〇年

③ 目通り 一・九米

④ 高さ 十米

⑤ 樹張 十米

⑥ 野遊びとは、鷹狩りをさす。即ちが狩りの折

に当山に立ち寄りられたと解してよからう。鷹狩りの石のもつと民心の懐柔策が窺えるのである。

① 林泉寺

越谷市の史蹟と巨説より、

浄土宗林泉寺は（増林と題）は今から約五百年前  
文正元年本誓上人が開山、本尊は三尊の弥勒、此殿  
體に惠心の作れる弥勒をまつてある。現在は三十一  
代木村良純である。

明和二年三月十五日、性善上人の筆による白牌帳  
は「林泉寺開啓者、貞和二年丙戌年当乙亥迄三四の  
年、古は曠野の剝当にて、平僧と南伝え申候、其時  
代の耳尋に正観音の御願に托しあり、文正元年丙戌  
年にて上人地とす。前の池左征門、先の方には往  
古の觀音地なり、当時上人 寺と改め開山本誓上人  
正林良純和尚 長享元年三月十五日寂す」と述べら  
れている。

開山前百年頃、当時門前の治花征門（現損本助右  
征門氏）屋敷（観音寺地所社儀）にオリツルを構つ  
た白衣の行者が此地に觀音を安置したのが昔のはじ  
まりらしい。

寺の古文書や記録によると、この地の発達は北条  
の落武者が姓を替へ増林に土着し農を営むよつにな  
つた。これを先祖としているのに園塚家や宮川家が  
ある。土地の舊は正観音を熱心に信仰し、土地祭と  
を時進し次第に寺が繁盛して来たのである。境内は

六千四百坪の広い寺域となり、築師堂、觀音堂不動堂  
が次々と建立された。このような寺の形態は、真言宗  
の寺域であるので延享年間改宗されたのであろう。  
徳川の封建制度の確立、幕府の政策による檀家制度  
は意外に信託心を強め、寺に対する寄附なども多くな  
なされた。当時は八代將軍吉宗の尊信から寺田寺田  
本堂（享保二元年）鐘樓堂へ享保三年の建立とされ、  
音堂が改築されたのである。  
本堂の大きさは九間四寸、現に存する築造の門は  
當時の金と給西で建てられたと遺言の余程に説く。  
又天災等も詳細に記録されている。

② 駒止の榎

赤言が小田原城の北条氏を倒し全領を統一し東康が  
江戸城に入った翌日、天正十九年徳川永威、濃尾の親  
戚、奔遊び（鷹狩り）野を新科てこの地に來り、この  
時、林泉寺に立ち寄り、駒をつないだと言われ榎の水  
がある、これを駒止の榎と名づ

現地でごらんの様子、この地獄では見られない  
ようなお湯なもので、東一の榎の水である。越  
谷市の文化財の指定になつてゐる。

④ 権現廿戸

当山に立寄りし家康に茶を侍侍した。その水も汲んだと言われる。此寺を権現廿戸と稱して居る。権現廿戸の水が溢れているが、今から八十一年位前山は注がせ湧出していたと云われている。写真海蔵するが権現廿戸の跡の碑が立っている。「榎本宗茂書」と記されている。この記念碑が、木村長範、榎本益雄、渡田正文の各氏の寄附によって建てられている。この裏面には、榎本益雄氏が由来を記している。

前 中央記

節ク 慶長中東照公遷葬りを以て東武の野に來る毎に当山に憩ひて其の昔に遊むを故となせりと、余昭和十一年七月、遂に願申の、古文書に之を索む。乃ち、当山三十一世木村長範師に示す。亦其の跡を慕ひ、瀧從總代渡田正文氏之を識り共に余に記を求む。因て銘して後世に伝ふ。

昭和十二年 三月

正林山林永手遺從總代榎本益雄撰文并書

寄 贈 者

木村 長範

榎本 益雄

渡田 正文

然し下ら家康公がこの寺に立寄ったとの記録は残念ながら見当たらない。そこで林家寺の山主、木村氏に伺いしましたところ、

「越谷市桜井林西寺に有名な弁童上人が居り、家康は上人に合掌うとして遊名へ來た。然し上人は合掌ことを嫌ひ遊ゆが求めている。この時偈が家康と親で会い、その偈を「合掌偈」と呼ぶようになった。

これらの事から、家康公は越谷に來られた事は確かであろう、と伺われた。

又、土利上人を寺に來られたと云う記録等もあり、この地にも寺が昔に立ち別られたとも看えられる。

⑤ 住持専用之御駕籠

江戸時代中期より当山歴代住持が公式の外出に用いたる駕籠が寺の堂材として本堂の廻廊の天井に吊るされて居る。古くはなつて居るが、内側は米塗りにて、肘かけ、吊綱があり、窓は両除けの布、日除け御簾、窓の三段に裨られており、駕籠の長さ一・二米、巾〇九米、高さ一・二米の大ききものであり立派なものである。

尚、これに寺侍が上人のお伴をする時、帯つてあるに櫓、薙刀なども保存されている。

越ヶ市の史蹟と伝説」より抄録。

⑦ 観音堂 (林泉寺)

観音堂は四角四面、鎌倉時代の定朝の作と云われる。身の丈一尺八寸の正観音と、それに日杵ならしむの運慶と評される支那古代の彫刻師ビシマカツマの作の子安観音像が二本安置されている。

◎ 正観音

正観音は風来菩薩による創像などの年には、住友は正観音像をかつぎ、江戸に出で回向院に二十一日間の御開帳で、寺の一年間の生活費が奉納されたと云われる程、盛大なもので信仰のあつた観音であるが、現在は出開帳は行っていない。

◎ 子安観音

子安観音は高さ一尺、純金箔の御厨子の中に蔵つてある。この子安観音は現在でも極めて信仰が厚いので次に畧縁起を紹介しておく。

子安御座子安観音菩薩畧縁起記

初々当寺奉安箇子安観古音菩薩は美須羯魔天の作にして三國伝承靈驗無双の尊像也。昔仁明天皇のため大徳五台山にこもらせたまふ。杵から忽然として一人の童子現れ大師に示して曰く、法弘法の志望

く、彼の滄海万里の浪を別て法を此國に承むること、貴くも亦殊勝也。我汝に一つの仏像を授与せん。若美須羯魔天の作にして今に至つて歳霜をふり伝する人希にして利益施を夫い靈験かくるるに似たり。若し人阿つて信を此尊にかけ、念願偶りなまき誓と現に疾病瘳死をのぞき絶難にのぞきとまはし、又

中 畧

彼の仏像を諸仏汝の家には安置すべし。汝の身に於て、諸々諸心を断し、諸所の厄難を除き入りの為、身の尊嚴に惹る事勿れ。時に御石花門靈尊に慕ま、慈願て殊々信を植し、始離さ江て身を淨め、夜も明りぬれば汝に出向ひ春花をまきけ信心の誓を合せ、一か致々名観音菩薩皆得解脱と称し遂か向うに一瓶の舟来り既に彼岸有りぬれば大師に遍週し、恭しく敬礼拜し、夢の次第を語りしに、大師も亦人の信心を感じ、此の尊像を元安助石花門に御付属有りしより、其所において靈驗利益多かる中に別る。安産の守り強くありし故、助右衛門信心より此奇蹟ありとて、元安助右衛門を元安助石花門と言世

中 畧

汝の巾國武州増林、林泉寺住持三善は我に宿縁深く誠に尊修念仏の尊師なれば汝に我を彼方にいざせいて汝等共に浄土の安心念仏の法門を受け、九品の



往生を致すべしと瑞夢を蒙り上人等に仏刹を詣り瑞喜の涙にむせび、此尊像を守り奉り武蔵國増林に來り、三營に仏刹を具に認むに上人も兼ねて御告を蒙りしとて等に懇涙にむせび、殊々信心を彌進し、不断念仏の行者と成り、一生不退に同行して奇蹟の往生を遂らせしとなり、此尊像村に至り、近々に至る處、難産の憂なく信心の華は心の齋願を成就し、現に痲病痲死の諸の疫病危難を払い給ふ靈驗奇運かとふるにいとまなし。

後 語

沼軍の女「尊世」が深くこの観音を信仰し、御刑益があつたことを記してある。

※ ※ ※

この寺の言い伝えには、この観音は往古にオイツルを持った白衣の行者がこの寺にたどりついて附近の者に法を説き、いづこともなく去った跡に残されたのがこの像だと書かれている。

白衣の行者が海を渡って来たものか、それとも何処の人が定かではない。

子安観音は安産の仏様

この仏様を信仰すると難産しない。お産が睡いと言うのが評判になった。御用帳は毎年四月十八日。

この日は門前に子安観音の「ノボリ」が立ち、朝早くから当地に募いだ人や、他の地に募いだ人達が姑花嫁姿の盛装で参詣し安産を祈り又子供の成長を祈願するのである。この日の参詣者はお供え餅を觀音堂にあけ用帳の附燈明用ローソクと上供え餅をお供物として頂き、家族の者が傾ち戴く習慣になつてゐる。其参詣者は更に多く広い境内が人で埋まる程である。

◎ 薬師像

増林上組林取寺所有である。薬師堂は鎌倉時代以前に造りである。貴重な建物である。外廻は余り古い様には見えないが中の造りがよく手斧で仕上げた跡などが見え鎌倉時代を想はせている。本尊薬師如来は眼病を癒す如来様にして古から増林地区上組の薬師如来として信仰されている。この薬師堂の建物が鎌倉時代のものですれば当然板碑が在る筈である。その板碑が無いのはおかしい。然し心ない者によって失くされたものかもしれない。その理由が解らないが兎に角この越ヶ谷春日部市附近は石仏が良いのが多い所である。この薬師堂に安置されている鎌倉時代の板碑は珍しいものである。

(越谷市の史蹟と再説「より」)

# ☆ 越谷市増森の山王二十一佛板碑

會員 皇野百治氏述

## 一、はじめに

石造遺物である板碑の中で二十一仏板碑について論じられた研究論文は、私の見た範囲では極めて少ないように思える。しゆし、昭和八年に服部清道博士が著わされた『重刻的な大著』

## 「板碑概説」

の中の「二十一仏板碑と山王三十一真神道」をはじめとし、近年においては、萩原龍天博士の

「庚申講と山王信仰」、『文京区史 巻一』の

三論著が脚石をはじめとする 庚申講會々類による「庚申」義上の研究論文があり、その研究はほとんど成されているように思える。

## 二、山王二十一佛板碑の概説

板碑に刻まれる二十一佛の種子が、何を意味するか久しく学界において謎であったが、これを山王二十一社の中地仏であると最初気付かれたのは、当時天台宗の僧侶に入つておられた服部清道氏と考古学とくに板碑の研究者としてたれることの出来ない三輪先生の両氏といわれる。

山王二十一社は比叡山に奉祀する代表神祇で、山王

権現又は目吉権現と称している。

比叡山は延暦寺創立以前より神の鎮まる聖地と知られ「古事記」には大古より大山所神鎮座の靈山なりと記されている。

ところが、後、延暦二十三年最澄禪師後、このころに故勢をほるに當り、大和の三輪山に鎮座する大三輪神を比叡山に勧請して、唐の天台山の守護神である山王山王にならつて、山王権現と尊称して天台宗の守護神とし、大宮の本地仏、衆生の垂跡なりと称した。これがいわゆる大比叡である。

よつてここに本来より鎮座する大山所神を三宮の本地佛菩薩の垂迹とし、小比叡と称し、ここに大小比叡神の一山二社が生じ、はじめは山王と称するには、この二社に限つていたと云う。

その後、聖眞子の本地仏跡陀を加えて、山王三所又は三聖とした。その後、更に八王子、客人、十禪師、三宮を加えて之を七七社とし、更に数を増して大行事牛御子、新行事下八王子、早尾、王子、室杖の中と社山御子、大宮置殿、下山末、岩池、氣比、二宮置殿、應主子の下七社を加え、上中下社を合わせて山王二十一社と総称した。

この山王諸神は、平安時代に天台宗の教団に  
に依つて、守護神として比叡山に祀つた事に始まり、  
延暦寺が盛大にさるにつれて、山王権現も次第に整備  
され、鎌倉時代には、神仏習合説としての山王一実神  
道が形成され、室町時代に民間信仰としての基礎が基  
礎が確立されたのである。

そして、この頃より山王二十一社の本地佛種子を表  
わした板碑も造られ、その信託は全面的に及び、日  
吉山王は三千八百社を越すに至つたという。

なお、山王二十一社と本地佛種子の関係は次の通り  
である。

(右が山王二十一社 カッコ内が本地佛を表わす)

上七社

註 梵字は小沢国平氏の板碑入門一五三頁  
に依る

- 大宮 二宮 聖観音 八王寺
- (釈迦) (兼所) (阿弥陀) (千手观音)

- バク バイ キリク キリク

註 ( )内碑文 原文字は筆者補充解説もある

- 客
- (十一面観音) 十輝師
- (迦蔵) 三尊
- (普賢)

中七社

- 下八王持 王子宮 早尾 大行寺
- (虚空蔵) (文殊) (不動) (毘沙門)

- タラーク マン カーン バイ

- 聖女 新行争 牛御子

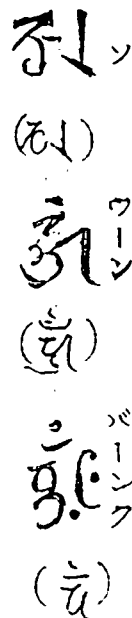
- (如意輪) (吉祥天) (大威徳)
- キリク シリー キリク

下七社

- 二尊蓮殿 山末 小十輝 気比
- (胎大目) (龜利支) (龜樹) (聖觀音)

- アインク マ カーン ナ

岩 滝 悪王子 大智窟殿  
 (井才天) (愛染) (金大目)



三 越谷市増林の山王二十一辨板碑

越谷市増林本田、尊師堂にあるもので、数少ない二十  
 一辨板碑であると喜つて良い。昭和廿六年三月一日  
 に、埼玉県指定文化財になつてゐる。

この板碑には板碑特有の頂部三角部に二条の切り込  
 みがなく、板碑全般に云えることだが、板碑造立期  
 の最終期を示している。

この種の板碑は、日蓮宗の題目板碑によく見られる  
 上部日月、天蓋の下に虚空蔵を主尊として四行主級の  
 種子を刻み、その中に二行で天正三年乙亥八月吉日の  
 銘があり、さらにその下に、前札をおき二十数名の入  
 名が刻まれている。造立趣旨銘は上部に申符供養と二  
 行である。

ところで上部にある日月を表わす二つの円について  
 大獲八郎氏はその著「頂申塔」において、越谷市の天  
 正三年の山王二十一社の申符供養塔は二つの円を、日  
 月と見るべきが、日日とみるべきが、はつきりしない

ところがあるとされているが、私は、他の二十一社の  
 碑の遺例その他を考へて右側が月輪、左側が日輪と考  
 へて置かう。つまり右側の円は新月と見るべきであらう  
 なる。越谷市増林本田の山高松之助氏の「家内記」  
 の取初には、次のように記されている。

「武藏国約玉郡増森村 山高松 大先祖 聖徳太子ニ  
 極光池を建立す。尊師如来を尊永法帝之御神  
 聖後、天正三年八月 申符供養塔建立す。其  
 高一五三〇、市三六四である。

十三六 増林寺



現在道に発見されている二十一併板碑は、次のようである。

内○印は越谷市に在つて、○印に当る

年号	月	日	干支	西曆	所	在	地
永正	十五年	十一月	戊寅	一五一一八	川口市西新井宿		
天文	四年	十一月	乙未	一五三五	蕨地区立石	南蔵院	
天文	廿一年	十一月	壬子	一五五二	越谷市 西方	田向蔵地	○
弘治	二年	十一月	丙辰	一五五六	春日部市豊春	茶師堂	
永祿	元年	十二月	戊午	一五五八	越谷市 大房	稻荷神社	○
永祿	〇年	十一月	壬申	一五七二	大宮市 蔵谷堂旅		○
元龜	三年	二月	壬申	一五七二	越谷市 西方	道祖禰	
元龜	四年(延)	二月	癸酉	一五七三	文京区小日向	百崎寺	
天正	二年	十一月	甲戌	一五七四	北豊師郡松伏町上赤岩		
天正	三年	八月	乙亥	一五七五	越谷市増森本田	茶師堂	○
天正	三年	十月	乙亥	一五七五	越谷市東川林七六		○
天正	三年	十二月	乙亥	一五七五	越谷市 千足	東蔵寺	○
天正	五年	十一月	丁丑	一五七七	松戸市鶴ヶ崎	千仏堂	
天正	六年	二月	戊寅	一五七八	越谷市増森上廻	蔵地	○
天正	八年	三月	庚辰	一五八〇	大宮市三橋一丁目		
天正	十四年	四月	丙戌	一五八六	大宮市穂田谷本		
天正	二〇年(政)	三月	壬辰	一五九二	南埼玉郡八潮町	小作田	
不詳					東葛飾郡沼南町	蔵ヶ谷	
不詳					南埼玉郡久喜町	白柴院	
不詳					北豊師郡松戸町杉戸		
不詳					越谷市 御殿路傍		○

二十一佛板碑は全篇でも珍らしく、発見例は表で見る通り教は極めて少ない。特にその分布は埼玉東部地域に偏在し、恩師千々和實先生の調査された板碑葬生誕地某地と云われる旧比企郡、旧大里郡に一基も存在していない。又山王信仰が山岳信仰であるのに、旧荒川、旧利根川と云った河川沿岸の下流沿いに多く分布することは、極めて注目すべき事である。

私はこのような埼玉東部に二十一仏板碑が密集偏在する事は、当時荒川上流地域より流行して来た板碑造立思想と、比叡山より生まれて来た山王信仰の思想とが、互に冥祥地より分離された埼玉東部周辺地域において時期的に見ても地域的に見ても、両者がうまい具合に結びつく原因も持っていたのではないかと思っている。

何れにしても山王信仰の本願にかかわる同趣であるので、これから大いに研究の手を差延ばせねばならない分野であると思う。

以上、誠に拙筆であるが、二十一佛板碑について少なりとも御理解いただければ幸と存じます。

なお、中斎を承すに当り、便宜をいただいた水村信次四郎健氏に末届ながら厚く御礼申し上げます。

※ 参考文献

- 服部清三改著 板碑板碑 「水沢国半著 板碑入門」
- 千々和 実著 武蔵国板碑集
- 萩原 隆太郎著 旧利根川群の中世文化 板合塚等
- 実中総務会編 「実中」
- 星野 昌治著 越谷市の板碑研究 (一)

二十一佛板碑

種別 県指定考古資料  
 名称 二十一仏板石燈婆  
 相定日 昭和三十六年三月一日  
 所在地 越谷市大寺町森



天正三十八年八月 建立されたもの。市内楮森の小島氏宅に発見された。記録の最初は「武蔵国埼玉郡楮森村小島家大元祖尊徳二年二月慈元重を建立す、其師如法を寛永法師の御教りにて開基、後天正三十八年申侍候秘塔を建立す」と記されて居ることから、享徳二十二年に築師とまごむられる慈元重が建立され、一五〇五年の天正三十八年八月に境内に建立されたものである。

(越谷市指定文化財一覧表)

昭和四五年六月三十三日史跡めぐり資料に二十一  
 体の研究を皇財会費が発表され、その時問題として提  
 起された「東部地区への偏在の理由」について、平生の  
 考察した範圍に於いて提示し大方の御意見を承り度い

理由 山岳信仰と鎌倉幕府初期の政治的急務の「遠征」  
 その端は義経の奥州下向に頼朝の隠密作戦が在った  
 その役割は大御様と称する「六十天回遊行者」を主  
 力とした。随つてこの行志、修験者は皆一芸に達し  
 た者を先達として案内せられた。先達の資格亦甚しい  
 處因の結果

(1) 奥州路日光路に通ずる要所を修験者で監視せし卑近  
 の輿地に修験道場をつくり周辺の統路山道を見守ら

山王信仰が山岳信仰であるのに旧荒川  
 旧利根川の河川沿岸の下流沿いに多々  
 分布する理由の考察  
 三原生

(2) 修験者結果分布図で明らかで通り中心は幸寺不動  
 て其の西翼に一は羽生方面大蔵村。他の一は鹿谷の  
 東方西方(大伏)を置く(元大社) 東光院利生院(大聖院) 大聖寺 照山 不動堂(神王院(鹿寺)) 他東方  
 安養寺 兼王寺 觀音寺を建立大聖寺末寺及幸寺直系の  
 廣瀨院 海光院 大正院(増林) 江戸島山風國守末社戸  
 大治村倉取社或東方玉蔵院 普門院等限りない  
 3. 時を経て里町末期から戦前時代の廿一傳亦故あり

西方村	山王寺	本山幸寺	元大社六伏の禮	創立年月	西庄証元	備考
	既下東光院	〃	〃			
	利生院	〃	〃			
	神王院	〃	〃			
東方村	安養寺	〃	〃			
〃	兼王寺	〃	〃			
〃	觀音寺	〃	〃			
〃	玉蔵院	〃	〃			
	普門院	〃	〃			
東新院		六由天正中	大聖寺中興の人間人			

飯積村	金剛院	〃		
秀倉村	南光院	〃		
神生村	南懐院	〃		
〃	神明社	〃		
古河川田村	別当密蔵院	〃		
〃	文殊院	〃		
和戸村	別当本覚院	〃		
須加村	龍光院	〃		
内牧村	南勝院	〃		
春日額	仙東院	〃		
〃	普門院	〃		
八条額	妙覚院	〃		
神明下	大行院	〃		
大沢	貞徳院	〃	幸手不動院配下	
〃	大徳院	〃	本山修験	
〃	王宮院	〃		
〃	浮谷院	〃		
掛山村	諏訪社	〃		
黒坂村	魚徳院	〃		
幸手殿下分	〃	〃		
大治	春取社	〃		
〃	大正院	〃		
〃	梅光院	〃		



正大寺 羽三派の跡あり。山合社(古大社)

宝徳寺 上分に在り(法蓮坊) 香林坊(由珠坊) 明見坊(七三初)

高性寺 下分に在り 小山兵衛 頼朝時代より

東承坊 龍藏坊

御藏院 聖手不動院 龍下 三峯山

吉本坊

大泉院 蓮台坊と称す

奥藏院 五帝山と号す 兼師堂あり 不動兼師と云ふ

漆木坊 上分に在り。其他百箇の寺が野方ありき

東方、西方、五首派地区は旧利根川と旧筑川活いの母所を全部別の演形の網まのびれることが出来ぬ。

この御會の名残りが里町に至り吉河公方と幸喜との因縁が密度をまし未期から戦前の痕相を甚だしく致し世上の無常感は愈々まし、弘治、永禄、元龜、天正文祿にわたる戦火のまき添いは愈々濃くなつて来た。

小田原北条と岩槻城主との關係、古河と上杉から本殿后は秀吉と小田原の關係に至つてこれら興亡の陰に無常と遁石、痛癢にまつわる寺院の役割は大きく、独り山岳信仰に限らず、長安具言宗、修験行者を問わず人生のバツクボーンとして十三杵、廿一杵の縁となつて具現されたものと考えるのである。偶々中枝が山岳界中心で表現型態に特徴付けられたに過ぎないだろう。

幸手配下の直置文部修験者のたむらする地である、この外に奥州羽黒行人の修験場として江戸青山寺傘下のも、江戸寺羽山派のもの、大和山城派の三聖院派のもの、下総百千宗派のものなど合計で有余々寺散在している。その中から各地域に影響を及ぼす修験場について調査しよう。

戸音羽町菅門院系 江戸青山鳳凰寺

八 澄海寺、入 法世寺(鶴ヶ管根) 同正海庵

九 大徳院(八条)

尾崎村常楽寺配下(羽黒直系の修験)(地蔵区)

圓照院 下大崎村 河原井大徳院、長家寺 常福寺

新福寺 慶重院 宝徳院 廣徳院 喜福寺 常念寺

羽黒社寺、山王社(五首派) 武藏院(漆木坊)

么 菅内古寺 一ツ木龍海寺 山東光法 龍調三聖院 木

古荒川の内 音音寺 京都龍調寺派(羽生の元大社)

第二 この修験場は太平の天下に放いては文化交流の一翼を担っている。一は京都直系の文化を武蔵經由の契州伝出。関東縁故文化の地方化に足跡を残す。他家の先を行く。一は民間の山岳信仰が東山信仰となり、山に事よせて 喜わざ様、南か様、見猿に結び付く寺或處に事せて伊弉諾太子、御嶽御留主、諸々ご参詣と仰み合わせ見面をなめる先達ともなつて来た。当該地区に金剛杖の姿い事も六平の中の表型と冠われる。